

【資料紹介】

実践女子大学図書館蔵「探幽縮図」

宮崎 法子

はじめに

二〇〇七年の秋、古書展に出品されていた「探幽縮図」の中に、かつて筆者が論文で取り上げた夏珪「江城図」(『東洋美術大観』巻八所載、下条家所蔵、現在焼失)を原図とする縮図が含まれているのを寓目した。その縮図は、蔡秋来『夏珪絵画芸術成就之探研』²に挿図として掲載されていたものの、所在不明で確認できなかった図であり、日本における夏珪受容を考える上で貴重な資料であった。それが再び所在不明になることを避けるため、当時研究代表者を務めていた科学研究(基盤研究B「日本近代における中国書画コレクション」の形成についての研究)の助成金と、さらに本学図書館の協力によって、その図を含む二巻の縮図を入手し、本学の所蔵に帰すことになった。ここに紹介する実践女子大学図書館蔵「探幽縮図」である(以下、実践本「縮図」と記す)。

本年二〇一〇年度の本学大学院東洋美術史特論Aの授業におい

て、本作品を取り上げ、基本データを確認し、関連資料の蒐集と考察を行った。その成果から基本的なものを、図と表の形にまとめ、箱や付属品などの情報も含め、ここに資料として紹介し、今後の研究に資することを期すものである。

「探幽縮図」については、すでに京都国立博物館編『探幽縮図』上・下(一九八〇・八一年)、文人画研究所編『探幽縮図』(一九八六年)などまとまった形で公開されている。また、ベッティナ・クライン(児島薫訳)「ベルリン東洋美術館蔵 縮図画帖『筆園佚遊』(『國華』一〇九一号)、小野真由美「新収品紹介 探幽縮図狩野探幽筆」(上)(下)(『MUSEUM』五九八・六〇一号 二〇〇五・二〇〇六年)など、所蔵館ごとの蔵品が図とデータとともに紹介されてきた(巻末・関連参考文献参照)。本紹介でも、それらを参照し、実践本の現状に合わせて体裁を整え、縮図の内容を表にした(55〜58頁)。表は、院生が作成した。留書の釈文については、

受講者が分担したものを宮崎が訂正、最終確認を行った。授業の受講者は、真嶋瑞穂、伊藤美和、賀韻先、馬冬青、須貝美沙貴、川上怜（以上本学修士課程院生）、皆川三知（本学大学院修了生・科目履修生）である。表やデータの作成とまとめは、賀、須貝、真嶋、皆川が中心となり作業を行った。最終的な文責は、宮崎が負うものである。50頁以下に掲載する図版と表が本資料紹介の中心となるが、ここでは、補足的に、実践本「縮図」の概要を述べることにする。

探幽縮図

周知のように「探幽縮図」は、徳川幕府御用絵師であった狩野探幽（慶長七年～延宝二年、一六〇二～一六七四）のもとに、鑑定のために持ち込まれた古画を、探幽が縮写記録したものであり、その数は膨大なものになる。明暦三年（一六五七）の大火により、それ以前の分は焼失したと考えられており、現存の年記のあるものは、寛文年間（一六六一～一六七二）のものが最も多く見受けられる。

探幽縮図は、探幽自身にとって、またその後の狩野派にとっても制作や鑑定の拠り所として重要なものであったと考えられるが、後、散逸し、現在は内外の博物館・美術館などの諸機関や個人収集家のもとに、様々な形で分蔵されている。その一部は、すでに上述のような図入りの刊行物や、インターネット上で紹介されているが、その全貌は未だ明らかになっていない。すでに指摘されているように、そこには、探幽自身の手になるものの他に、他の狩野派の

絵師による縮図や模本なども混在している。⁴ 伝統的な絵画学習において、模写を行うことはきわめて重要な手段であった。特に探幽の縮図や写生帖などは格好の手本として、狩野派以外の画家によってしばしば写されたことが分かっている。⁵ 今日伝わる「探幽縮図」にも、後の狩野派絵師などが「探幽縮図」をそのまま模写したものが混在している可能性がある。しかし、そのことによって資料的な価値が大きく損なわれることはなく、「縮図」の全体像を捉えることがまず求められる。「探幽縮図」はそれらを含めた総称であり、総体として貴重な資料であることに変わりはない。

実践本「探幽縮図」の現状と付属品

本学所蔵の探幽縮図は卷子本二巻に仕立てられ、桐箱に収められている（付図1）。第一巻は本紙の高さ13.8cm、全長242.7cm、六紙十三図からなり、第二巻は、高さ13.4cm、全長289.9cmで、八紙二十図からなる。紙本墨画で、図⑦「鶏図」や図⑮など一部の絵には彩色が施される。

また、付属品として、京都の古筆鑑定家、大倉汲水の癸未年の極札が各巻に一ずつ付されている（付図2）。この癸未年は、文政五年（一八二三）にあたる。その頃、本作品は上方にあったと考えられる。極札には、各巻の紙数が記され、最初の留書の冒頭部分と思われる語句が写されている（付図2釈文）。

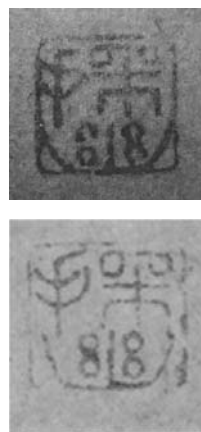
他に伯仲という伝未詳の人物の「控書」一紙があり（付図3）、その書跡は、箱書きと同一である。箱書と控書ともに、大倉汲水の

極めに言及していることから、汲水以降のもので、近代の好事家によると推測される。控書には画題と原図筆者が列記されているが、内容は誤りが散見する。本紹介では基本的にその記事は採用せず、画題は新たに比定した。しかし、参考のため控書の写真と釈文も掲げた（付図3・釈文）。

注目される点は、第一巻現状の配列が、控書や極札と異なっていることである。控書には、現在の図⑦、⑧、⑨、⑩、⑪、⑫、⑬、⑭、⑮、⑯、⑰、⑱の順に記されている。また、大倉汲水の第一巻の極札の裏には、図⑦の鶏図の留書が写されており、第二巻の極札では、現状の最初の留書が写されている（付図2-2）。すなわち、大倉汲水の頃も、第一巻の冒頭は控書と同様現在の図⑦であったことが分かる。現状の第一巻は、第二巻に比してほぼ一紙分短く、また汲水の極札に記された紙数七より、第一巻の紙幅は一紙少ない六紙である。これらのことから、汲水の極めの後、第一巻から一紙失われ、その後伯仲が控書を書き、さらにその後現状のように改装されたと考えられる。いずれにせよ、このように小さな分量の縮図でさえ、幕末以降において、出入りが見られることは、一般に縮図の伝来が複雑であることを物語っている。

実践本「縮図」について

実践本の縮図には、「探幽」の朱文方印がほぼ紙幅ごとに押されている（第一巻に六、第二巻に八）。このような頻度で探幽印が押されている縮図は、他にはほとんど例を見ない。その探幽印はすべ



挿図1
上) 実践本探幽印
「探幽」朱文方印
縦・横各0.9cm
下) 京博本探幽印
「探幽」朱文方印
縦・横各1cm
出典「京博本探幽縮
図概説」『探幽縮図』
下巻、235頁
同朋舎出版、1981年

て同じものであり、京都国立博物館本「縮図」中に押されている朱文方印とよく似た印影だが、字形に違いがあり、「幽」字の「山」の左右が枠に着いている（挿図1）。これらの点から、本作品の印は探幽のものではなく、後にまとめて押されたものである可能性が高い。その時期は、第一巻図⑥「山水図」の右下に押された印が、左半分しか残らず、その右には留書を書いた細長い別紙が継がれていることなどから、現表装より前と考えられる。

また、紙はほぼどれも同質紙と思われるが、今挙げたように第一巻の図⑥「山水図」の留書は、山水図の本紙とは別の、厚めの紙に書かれ紙の色も濃い。冒頭に述べたように、この山水図の原図は、夏珪筆として伝来したもので、畠山記念館所蔵伝夏珪「山水図」とともに、その原図はもととも同一画卷の一部をなしていたと考えられている。探幽が、それを夏珪ではなく周文筆と鑑定していることは、意外に感じられる。先に挙げた蔡氏も、探幽は周文画と鑑定したと記しつつ、夏珪資料としてこの縮図を紹介していた。しかし、以上述べたように「周文筆」という留書が、「縮図」部分とは異なる紙に書かれていることから、周文筆という鑑定も、もともと他の

絵に対するものであった可能性も考えられるのである。

その他の本縮図中の留書は、表に示した通りである。第一巻で四、第二巻で八、全部で十二図に留書が付されている。月日の記載はあるが、年次を記した留書はない。原図の作者として挙がる名は雪舟が最も多く、その点はすでに公刊されている「探幽縮図」と同様である。

なお、本作品の留書の筆跡は、線が細く擦れ直線的で、一字一字一角一角が途切れているような特徴がある。これは、他の探幽縮図の留書の、なめらかに連綿と続く崩し字とは異なっている。同様のことは、本縮図の一部の絵の線描にも顕著である。線がかすれ、直線的でポキポキした描写を見せる図が多い。それらは、探幽画に一般的、のびのある筆線とは異なる特徴といわざるを得ない。

先に触れたように、これまで紹介されている「縮図」にも、いくつかの手が混在している。縮図は、様々な画家により何度も写されて、様々なものが混在する。実践本「縮図」にもそのような事情が考えられるであろう。しかし、それらも含め広義の「探幽縮図」資料として考察することが、先ず求められよう。

今見てきたように、図⑥「山水図」には原図が存在しており、それを正確に写した縮図であった。その他、院生により原図と考えられる作品が確認出来たものが数点ある。それらを当該図版の側に参考作品として掲げた。図⑦の彩色「鶏図」の原図として、須貝が伝錢選「鶏図」（出光美術館）を、図②⑦の原図候補として胡鎮筆「躍

魚飛鳥図」（京都国立博物館）を皆川が探し出した。また図⑩については、真嶋が、伝牧谿「布袋図」（九州国立博物館）、相阿弥「腹さすり布袋図」（出光美術館）を挙げたが、この布袋図は同図様の作品が多く、かえって原図の特定は難しい。よって、同系統の図様の最も古い例として、伝牧谿画を掲げた。また、賀は、雪舟筆とされた図⑧、⑨や図⑮、⑳、㉑、㉒と近似する図柄の作品を、現存の雪舟作品（中村溪男・金澤弘編『雪舟画業聚成』一九八四年）や、他の公刊された探幽縮図中から複数集めたが、全く同一の図は見いだせなかった。それらによつて、江戸時代における雪舟画人気や、そのなかで流通していた「雪舟画」の多くがどのようなものであったかを知ることができたものの、同一図様でないため、割愛した。その他にも、原図を特定するには至らなかったが、院生が各自分担した図について、流派や図様の系譜について検討と考察を行った。いくつかの図、例えば図⑬人麻呂像のように、雪舟画と同様、ほとんど同じ図柄の作品が多くあり、他の縮図中に複数見いだせるものもある。それらも、雪舟画と同様、当時好まれて多く流通した図様と考えられる。本紹介では、図柄が同一で、原図として特定できる蓋然性が高いもののみを参考作品として示すにとどめた。

今後、ここに挙げた原図作品の調査を行い、伝来を含めた検討を進めることが出来れば、日本における中国画とその受容史について、具体的なことがもう少し明らかになると期待される。それについては、今後の研究にゆだねることとしたい。以上、実践本「縮図」紹介の補足説明とする。

以下、図版と表によって、実践本「縮図」の図様やデータ、ならびに留書を紹介し、一部の原図候補作品を示すことによって、所蔵機関としての責を果たすこととしたい。これが、今後の日本・中国絵画史研究において、ささやかな一助となることを願うものである。

1 「日本所在有関夏珪山水図資料」『故宮博物院刊』二〇〇六年第六期
そこで筆者はかつて、この原図の「江城図」と崑山記念館蔵の伝夏珪「山水図」を取り上げ、現在台北故宮蔵の夏珪筆「溪山清遠図巻」との比較を通じて、「溪山清遠図巻」よりもモチーフや景物の豊富なもう一つ別の夏珪筆「山水図巻」が存在する可能性を論じ、その中国絵画史上の意義について考察した。

2 蔡秋来『夏珪絵画芸術成就之探研』中国文化大学出版部印行一九八二年
3 巻末 参考文献参照。また、東京大学総合博物館WEB美術館などで、紹介されている。

4 ベッティーナ・クライン、児島薫訳「ベルリン東洋美術館蔵縮図画帖『筆園佚遊』」『國華』一〇九一号 一九八六年。文人画研究所刊『探幽縮図』一九八六年など、先行研究の多くでその点は指摘されている。

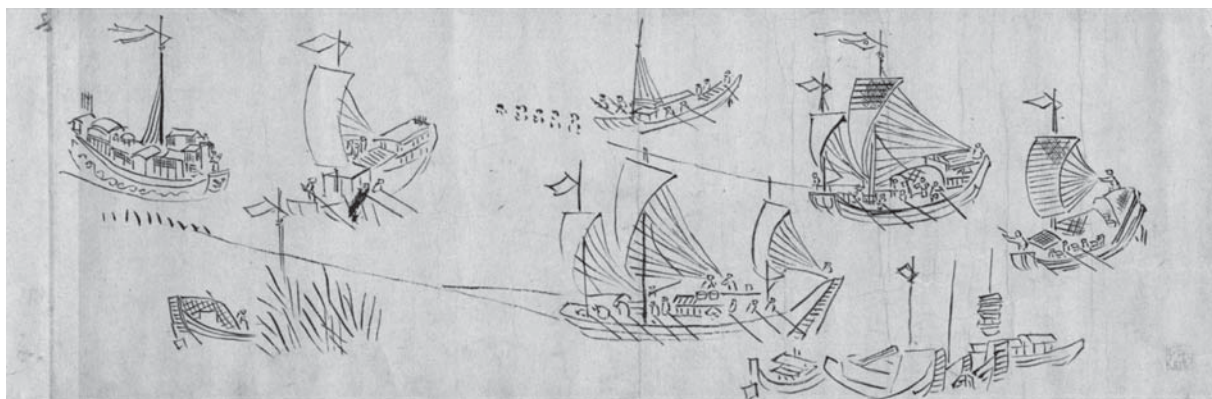
5 仲町啓子氏のご教示によれば、光琳が、探幽の写生帖を、留書を含めて写したものも存在している。

6 この探幽朱文方印は、京都国立博物館所蔵探幽縮図に押されているもの

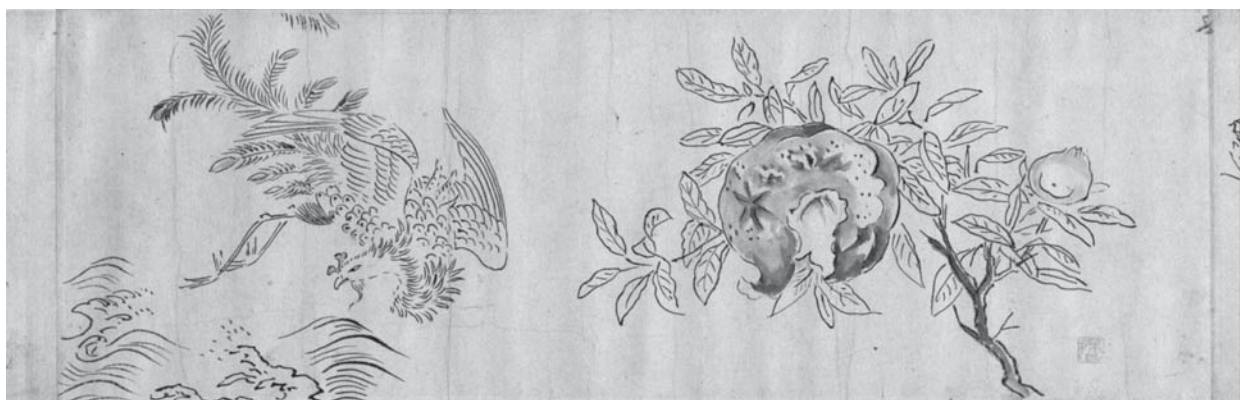
よりも、大きさがわずかに小さく、また字形もわずかに異なっており、京都国立博物館本とは別印である。縮図の伝来のなかで、偽印が後にまともて押されること自体は起こりうるであろう。いずれにせよ、この印は、田沢裕賀「狩野探幽の遺印」(『美術史学』15号1994年)に紹介されたなかには見あたらず、また、狩野探道『鍛冶橋狩野家印譜』(国会図書館近代デジタルライブラリー)中にも掲載されていない。なお、『鍛冶橋狩野家印譜』のデジタル資料については、板橋区立美術館学芸員の佐々木英里子氏を通じて、同館館長の安村敏信氏にご教示を賜った。ここに記してお礼申し上げる。

7 大倉汲水は、文化十年(一八一四)版と文政五年(一八二八)版の『平安人物志』『古筆』の條にその名が載ることから、この癸未年は一八二三年と分かる(東大本『平安人物志』(文政五年版)、国際日本文化研究センターデータベース『平安人物志』(文化一〇年、文政五年))。また日文研データベースに付された人物紹介では、大倉汲水の没年は文政八年(一八二五)とする。

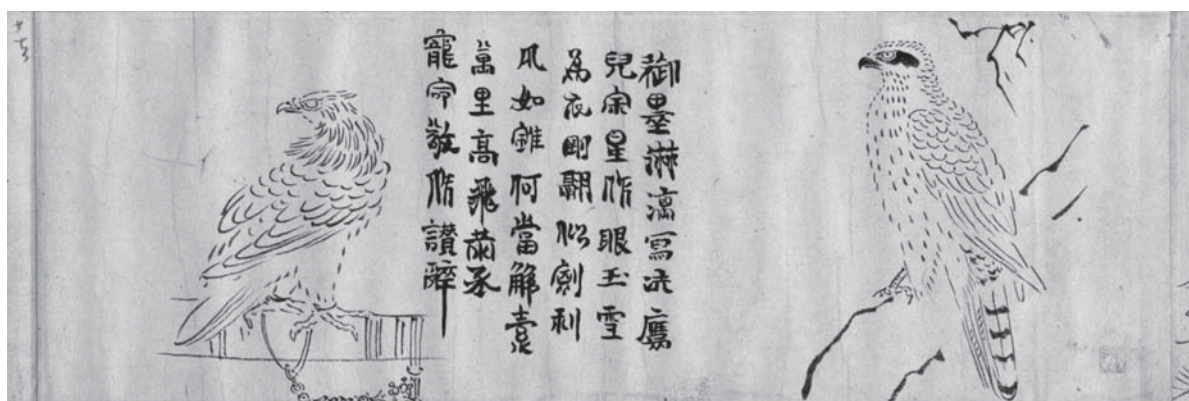
図①



図②



図④



図⑤

図③

図⑥



図⑦

図⑧

図⑨



図⑩

図⑪

図⑫

図⑬



図⑥ 参考

夏珪「江城図」
旧下条家蔵

出典
『東洋美術大観』
(巻八)



図⑦ 参考
元 銭選「鶏図」 出光美術館

図⑩ 参考
伝牧谿「布袋図」九州国立博物館

図
14

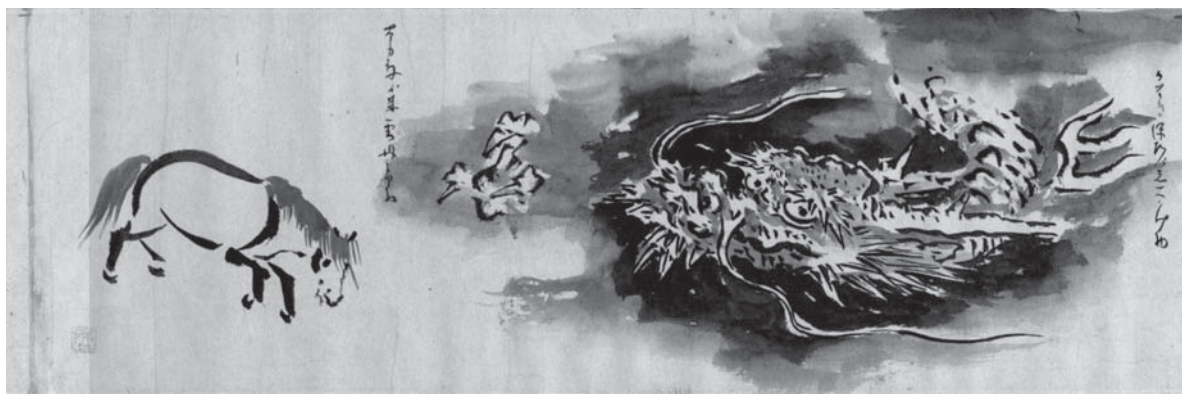


図
15



図
16



図
17



図
18



図
19



図
20



図
21



図22

図23

図24

図25



図26

図27



明 胡鎮 参考
躍魚飛鳥図 京都国立博物館

図28

図29 (上)

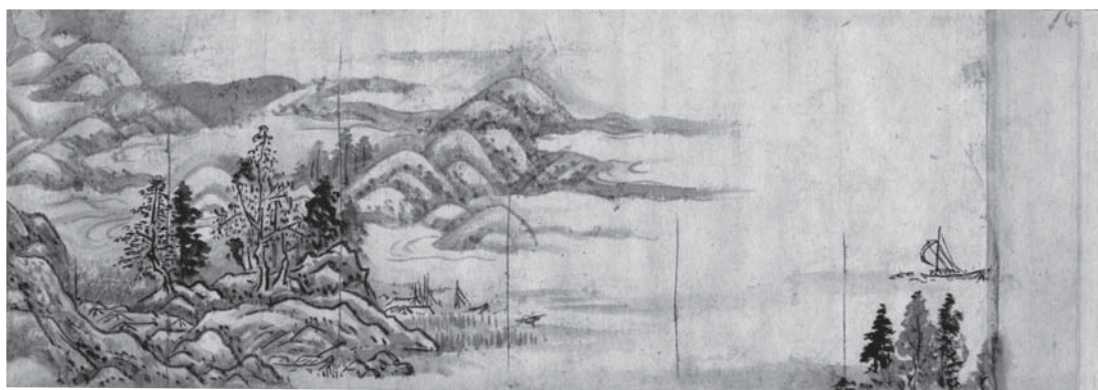
図30 (下)

図31 (上)

図32 (下)



図33



【付図】箱・付属品

付図1 「探幽縮図」 外観



【箱書釈文】 探幽画巻物 二巻

大倉了恵極添

付図2 大倉汲水極め

極札（表）



【釈文】

（右）古畫寫巻物七枚繼一卷 癸未秋

（左）古畫寫巻物八枚繼一卷 癸未秋

【印】（左右共通）「昔齋」（黒文円印）

（関防印）「思無邪」（朱文長方印）

極札（裏）



【釈文】（右）探幽法印守信

（五月十七日し神明より来）

（左）探幽法印守信

（かま「き」源左エ門系大かけ物）

【印】（左右共通）「汲水」（黒文方印）

極札 外包み



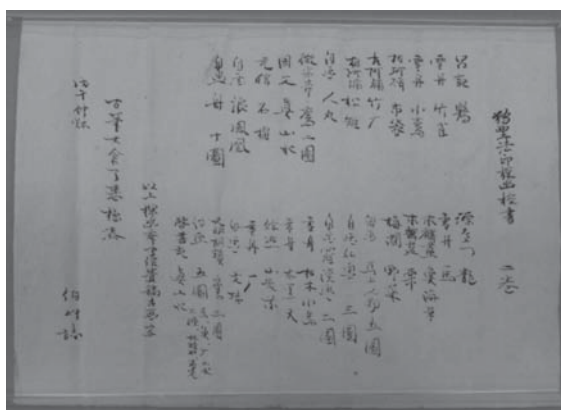
【釈文】 探幽法印巻物

内包み



【釈文】 極

付図3 伯仲 控書



【釈文】

探幽法印縮図控書

二巻

呂記

鶏

源左エ門

龍

雪舟

竹雀

雪舟

馬

相阿弥

小禽

本鱗畫

魚海草

相阿弥

布袋

本鱗畫

栗

相阿弥

竹厂

梅潤

野菜

自画

松雄

自画

馬上人物五圖

自画

人丸

自画

仏画 三圖

徽宗帝

鷹二圖

自画

羅漢画 二圖

周文

眞山水

雪舟

枯木小鳥

元信

石榴

雪舟

太黒天

自画

浪鳳凰

徐熙

山散花

自画

舟十圖

雪舟

文殊

自画

史明胡鎮

自画

鷹 三圖

自画

五圖

眞山水

（馬、魚、厂、山水）

古筆大倉了恵極添

戊午仲秋

伯仲誌

以上探幽斎守信貴稿古画写

【表】 実践本 《探幽縮図》 全二巻

賀韻先 須貝美紗貴 真嶋瑞穂 皆川三知 川上怜

【凡例】

- ・ 原図作者は留書で探幽が鑑定したもの及び図から明らかかなものを掲げる。
- ・ 探幽の覚書などは「留書など」に記載し、原図中の賛などは、「原図中の賛、落款・印章」に記載した。
- ・ 画中の判読不明の文字は□で表示し、類推可能なものは「」で表した。
- ・ 原図候補となる作品で、図版に掲げたものを備考に記した。
- ・ 第一巻の本紙法量、縦13.5cm、長さ242.7cm。第二巻の本紙法量、縦13.4cm、長さ289.9cm。

第一巻

紙継ぎ2 重なりなし（線に見える）、右上に鍵型の印なし	2		紙継ぎ1 重なり2mm、右上に鍵型の印あり	1	紙数
	図3	図2		図1	通し番号
	39.4cm			39.8cm	（横）法量
	波上鳳凰図	柘榴図		白描帆船図	画題（形状）
					原図筆者
	淡彩	淡彩		墨画	形質
	留書なし	留書なし 右下「探幽」朱文方印		留書なし 右下「探幽」朱文方印	留書など
					原図の賛、落款・印章
					備考

6				5			4	3		
図 13	図 12	図 11	図 10	図 9	図 8	図 7	図 6		図 5	図 4
40cm				40cm			38.8cm	1.7cm	38.7cm	
柿本人麻呂図	松雄図	竹雁図	布袋図	小禽図	竹雀図	鶏図	山水図		架鷹図	鷹図
				雪舟	雪舟	呂紀	周文		徽宗	徽宗
墨画	墨画	墨画	墨画	墨画	墨画	着色	墨画		墨画	墨画
留書なし	留書なし	留書なし	留書なし 右下「探幽」朱文方印	留書なし	「東門」殿「雪舟筆」 右下「探幽」朱文方印	留書「五月十七日神明より来る呂記 と外題遣候」(「記」ママ)	右下「探幽」朱文方印(半印)	廿七日□□□殿より来周文筆	留書なし	右下「探幽」朱文方印
									賛「御墨淋漓。写「決」鷹兒。 「金」星作眼。玉雪為衣。 剛翮似劍。利爪如錐。何当解索。 萬里高飛。恭承寵命。敬作讀辭。」	
服の模様を別に描き写す			【原図】伝牧谿「布袋図」九州国立博物館蔵など		図8と図9は、対幅作品の可能性あり	【原図】伝銭選「鶏図」出光美術館蔵	【原図】伝夏珪「江城図」下条家旧蔵(焼失)	題箋状別紙	賛あり	

紙継ぎ4 重なり2mm	4		紙継ぎ3 重なり2mm	3		紙継ぎ2 重なり2mm	2			紙継ぎ1 重なり2mm	1		紙数		
	図21	図20		図19	図18		図17	図16	図15		図14	番号	通し		
	43.9cm			23cm	40cm			40.1cm			(横)	法量			
	南泉斬猫図	釈迦三尊図		狩獵図	瓜虫図 (団扇)		栗図	魚図	馬図		墨龍図	画題(形状)			
							梅潤	李麟	雪舟			筆者	原図		
	墨画	墨画		淡彩	淡彩		墨画	墨画	墨画		墨画	形質			
	留書なし 左下「探幽」朱文方印	留書なし 左下「探幽」朱文方印		右人物衣に「六、白、ニリ」及び中 下馬に「白」の書き込み有り 留書「左衛門殿系也」 左下「探幽」朱文方印		留書なし左下「探幽」朱文方印	留書「松草宮内□より来客□春□□ より来小田原梅潤系也」	留書「八十四翁本麟画」		留書「帯刀殿より来雪舟かけ物」 左下「探幽」朱文方印	留書「□□□源左エ門系大かけ物」	留書など	原図の賛、落款、印章	備考	
	折れ有	折れ有													

8	紙継ぎ7 重なり32mm、別紙で補強	7					紙継ぎ6 重なり2mm	6		紙継ぎ5 重なり2mm	5			
図33		図32	図31	図30	図29	図28		図27	図26		図25	図24	図23	図22
34.7cm		40.8cm						22.3cm			40.7cm			
山水図 (屏風一隻)		寿老図 (扇面)	四睡図 (扇面)	雁図 (扇面)	馬図 (扇面)	藻魚図		三鷹図	縄衣文殊図		落雁図	山茶花図	大黒天図	枯木小鳥図
								胡鎮			雪舟	徐熙	雪舟	雪舟
墨画		墨画	墨画	墨画	墨画	墨画		墨画	墨画		墨画	墨画	墨画	墨画
留書なし 「探幽」朱文方印	留書なし	留書なし	留書なし	留書なし	留書なし 左下「探幽」朱文方印	留書なし	留書なし	留書「伊井兵部殿より来雪舟正筆」	留書なし	留書「雪舟写」	留書「□□かけ物雪舟と外題遣候」 右下「探幽」朱文方印			
						賛「海濶従魚躍 落款「四明胡鎮」 「□」方印の模写	賛「海濶従魚躍 天空任鳥飛」	落款「徐熙」 「□」方印の模写						
						【原図】明 胡鎮「躍魚飛鳥図」 京都国立博物館蔵		紙接ぎまで二つの折れ有。三段に分けられる。(各長さ 14.7cm、11.0cm、15.2cm)						

「関連参考文献」

△書籍▽

- 1、狩野応信編『聚珍画譜』博文堂 1894年
- 2、狩野探道『狩野家印譜 乾・坤』1921年
- 3、溝口禎『探幽印影』1931年
- 4、大倉文化財団編『大倉集古館図録』大倉文化財団 1971年
- 5、中村溪男・北村四郎編『東京国立博物館所蔵 狩野探幽草木花写生』紫紅社 1977年
- 6、武田恒夫『日本美術絵画全集』第15巻 集英社 1978年
- 7、京都国立博物館編『探幽縮図』（上）（下） 同朋舎出版社 1980年
- 8、『大倉集古館蔵 探幽縮図』大倉文化財団 1981年
- 9、『日本の美術194 狩野探幽』至文堂 1982年
- 10、『特別展室町水墨画 近世絵画』茨城県立歴史博物館 1983年
- 11、安村敏信・板橋区立美術館『江戸文化シリーズ・狩野探幽展』1983年
- 12、文人画研究所編『探幽縮図』葦本莊五朗 1986年
- 13、『萬野コレクション』撰集 萬野美術館 1988年
- 14、平山郁夫、小林忠編著『秘蔵日本美術大観』2・7 講談社 1992年
- 15、安村敏信責任編『探幽・守景・一蝶 狩野派』（『江戸名作画帖全集4』 駸々堂 1994年
- 16、『大倉集古館500選』大倉文化財団 1994年
- 17、京都文化博物館『京都文化博物館開館十周年記念特別展 京の絵師は百花繚乱「平安人物志」にみる江戸時代の京都画壇』京都文化博物館 1998年
- 18、『生誕四〇〇年記念 狩野探幽展』日本経済新聞社 2002年

△論文等▽

- 1、「探幽縮図」『國華』32号 1892年
- 2、「狩野探幽筆做古図卷」『國華』305号 1915年
- 3、脇本十九郎「探幽縮図について」『美術研究』4号 1932年
- 4、添田達嶺「探幽縮図について」『塔影』13-4 1937年
- 5、大西芳雄「近世写生帖 探幽・常信」『MUSEUM』18号 1952年
- 6、梅津次郎「フリア画廊の地蔵権現絵と探幽縮図」『大和文華』13号 1954年
- 7、吉田友之「画史編削の場—日本絵画史の劃期をめぐって—」『美学』83号 1970年
- 8、中村溪男「狩野探幽傳とその藝術」（本間美術館『狩野探幽縮図展』カタログ所収）1978年
- 9、武田恒夫「狩野探幽」（書籍6所載）
- 10、大倉基佑「探幽縮図—大倉集古館の縮図類について—」『古美術』60号 1981年
- 11、河野元昭「探幽縮図—平福家本を中心に」『古美術』第60号 1981年
- 12、河野元昭「狩野探幽のこと—探幽縮図について」『美術手帳』477号 1981年
- 13、河野元昭「狩野探幽」（書籍9所載）
- 14、河野元昭「狩野探幽—平福家本を中心に」（書籍9所載）
- 15、河野元昭「探幽の伝歴」（書籍9所載）
- 16、吉積久年「旧岩国藩主吉川家蔵『木利申分書状』をめぐって—狩野探幽を中心に」『MUSEUM』409号 1985年
- 17、ベッティーナ・クライン、児島薫訳「ベルリン東洋美術館蔵 縮図画帖『筆園佚遊』」『國華』109号 1986年

- 18、河野元昭「探幽縮図索引の作成」『鹿島美術財団年報』5号 1987年
- 19、安村敏信「粉本と模写―江戸狩野の場合―」『日本の美学』13号 1989年
- 20、河野元昭「資料紹介『探幽縮図』東京芸術大学資料館蔵」『美術史論叢』9号 1993年
- 21、並木誠士「隔蓑記にみる寛永文化の世界16『隔蓑記』にみる絵画受容の在り方」『日本美術工芸』67号 1994年
- 22、伊藤大輔「探幽縮図」『東京大学コレクションⅠ 東アジアの形態世界』東京大学総合研究資料館 1994年
- 23、田沢裕賀「狩野探幽の遺印」『美術史学』15号 1994年
- 24、鬼原俊枝「狩野探幽筆『学古帖』と流書手鑑」(武田恒夫先生古希記念編『美術史の断面』清文堂 1995年)
- 25、板倉聖哲「探幽縮図から見た東アジア絵画史―瀟湘八景を例に」(佐藤康宏編『講座日本美術史 第3巻 図像の意味』東京大学出版会 2005年)
- 26、小野真由美「新収品紹介 探幽縮図 狩野探幽筆」(上)(下)『MUSEUM』598号 601号 2005年 2006年
- 27、宮崎法子「韓熙載夜宴図と明代江南仕女図」『実践女子学園・教育研究叢書17 仕女図から唐美人図へ』2009年
- 28、皆川三知「『探幽縮図』にみる『唐美人』」『実践女子学園・教育研究叢書17 仕女図から唐美人図へ』2009年
- 29、宮崎法子「狩野派模本から見た中国の仕女」『泉屋博古館紀要』第25巻 2009年

△その他▽

- 1、弄翰子『平安人物志』林伊兵衛 文化十年 1813年
- 2、弄翰子『平安人物志』尚書堂 文政五年 1822年
- 3、東京大学本探幽縮図 以下のURL参照
http://www.un.tokyo.ac.jp/digital/volume1.html/tenji_kaiga_48.html
 (2010年10月12日)

〔参考作品 出典〕

- 1、図⑥参考図(夏珪「江城図」下條家旧蔵)『東洋美術大観』巻八、審美書院 1908年
- 2、図⑦参考図(錢選「鷄図」出光美術館蔵)戸田禎佑・小川裕充『中国絵画総合図録 続編 3巻日本編』1999年
- 3、図⑩参考図(伝牧谿「布袋図」九州国立博物館蔵)『御物集成・東山御物』淡交社 1972年
- 4、図⑳参考図(胡鎮「躍魚飛鳥図」京都国立博物館蔵)京都国立博物館 URL <http://www.kyohaku.go.jp/syuzou/index.html> (2010年6月)